

美幾女の解剖

我が国における病理解剖第1号は、1869（明治2）年8月14日、医学校（東京大学医学部前身）における34歳の女性 美幾女の病死体に始まった。彼女は病死を予期し、自らの意思で死後解剖のために自身の遺体を提供する勧めに応じ、押印された親族の申請書「解剖之義ニ付御請申上覚」が残っており、特志によるものであると裏付けられている。

かつて腑分けと呼ばれた時代から、刑場で刑死者にしかできなかった解剖を、特志とはいえ病死者の遺体を刑場以外の医学校内で行ったということは、我が国の解剖史上、というより日本の近代医学上、特筆すべき事柄である。

美幾女の腕に、梅の折枝に短冊とその短冊に情人の名のある刺青があったことを題材にとった、吉村昭氏の小説「梅の刺青」¹⁾では、解剖執刀者を田口和美^{なぐち}として描いている。釈妙俳信女位の戒名のある美幾女の墓は、東京都文京区白山の浄土真宗念速寺にある（写真1）。

明治初期、医学校関係者の間では、人体解剖の必要性が切実なものとなっていた。東京大学に残っている記録“学校履歴”には、病理解剖の必要性を政府に訴える以下のような記録がある。

“病死した遺体を解剖することは、医学の道を進めるのに、この上なく大切な第一に行わなければならないことであり、解剖しなければ、何の病のどういう症状で死に至ったのか本当のことを知ることができない。”と述べている。

田口和美（1839～1904年）は、現在の加須市北川辺の生まれで、後に、初代東京大学解剖学教授に就任している。田口和美は、1877（明治10）年から1882（明治15）年にかけて「解剖攬要」を刊行した。日本語で書かれた初めての体系的な解剖書（13巻14冊）は実地解剖に基づいてまとめられた著作で、不断の研究の成果であり、その独創性は高く評価されている。その後、1893（明治26）年に



写真1 美幾女の墓（念速寺）

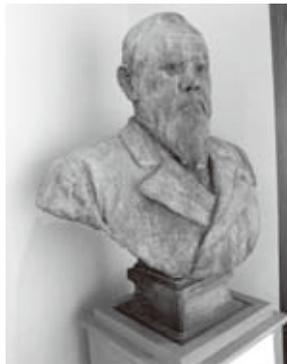


写真2 田口博士像（加須市北川辺郷土資料館）

は日本解剖学会初代会頭になり、1902（明治35）年には日本連合医学会（現在の日本医学会）が設立され初代会頭にされた。

長らく東京大学解剖学教室にあった田口和美の銅像は、1994（平成6）年に無償永久貸与となり、生誕地の加須市北川辺郷土資料館に展示されている（写真2）。

■ 参考資料 ■

- 1) 吉村昭:「梅の刺青」(新潮文庫「鳥抜け」(2002)所載)
- 2) 北川辺町教育委員会:わが国解剖学の父 田口和美博士 (2005)

〔日本診療放射線技師会 諸澄邦彦〕